

- (12) A. A. Maurer, *About Beauty. A Thomistic Interpretation*, 1983; *Thomistic Papers I & II*, ed. V. B. Brezik, 1984 などが刊行されている。
- (13) *Aletheia. An International Journal of Philosophy*, Vol. I, 1977 J. Seifert, Essence and Existence. A new Foundation of Classical Metaphysics on the Basis of "Phenomenological Realism" and a Critical Investigation of "Existential Thomism," および J. Crosby, The Idea of Value and the Reform of the Traditional Metaphysics of *Bonum, Ibid.*, I, 2 などの論文が注目に値する。
- (14) ウォーレス教授は科学史家としても著名であり *Causality and Scientific Explanation*, 2 vols. The University of Michigan Press, 1972; *Prelude to Galileo. Essays on Medieval and Sixteenth-Century Sources of Galileo's Thought*, D. Reidel, 1981 などの著作がある。
- (15) これらはマンチェスター大学出版部から刊行されている。
- (16) 参照。K. H. Tachau, *Vision and Certitude in the Age of Ockham* (Doctoral Dissertation) University of Wisconsin, 1981; The Problem of the *species in medio* at Oxford in the Generation after Ockham, *Mediaeval Studies*, 1982, p. 394—443.
- (17) A. Goddu, *The Physics of William of Ockham*, E. J. Brill, 1984.
- (18) 参照。拙稿「オッカムにおける直観的認識の問題」、『中世哲学研究』第4号, 1985.
- (19) Gordon Leff, *William of Ockham. The Metamorphosis of Scholastic Discourse*, Manchester University Press, 1975.
- (20) ノートルダム大学出版部から刊行予定。

第5回国際アンセルムス学会

山崎裕子

《St. Anselm and St. Augustine》というテーマのもとに、1985年9月16日から21日までの6日間、第5回国際アンセルムス学会 (Fifth International St. Anselm Conference) がアメリカのペンシルヴェニア州にあるヴィラノーヴァ大学 (Villanova University) で開催された。同大学 The Augustinian Historical Institute の後援によるもので、会期後半の20日から22日は、例年同研究所の主催する International Con-

ference on Patristic, Mediaeval, and Renaissance Studies (1985年度は第10回)と同時開催であった。アンセルムス学会がヨーロッパを離れアメリカで開催されるのはこれが初めてで、米国内委員5名により準備が進められ、その一員であるヴィラノーヴァ大学哲学部 Th. A. Losoncy 教授が national secretary を務めた。当初、古田暁氏が発表を予定されていたが、結局今回も前回同様、日本からは筆者のみの参加となった。

ヴィラノーヴァ大学は、聖アウグスチノ会により1842年に設立され、フィラデルフィアの西12マイルに位置し、240 エーカーのキャンパスを擁している。Villanova という名は、16世紀のスペインの聖人トマス・デ・ビラノーバ (Tomás de Villanova) にちなんで付けられたものである。

学会初日には、国際アンセルムス委員会々頭の R. Klibansky 教授による開会講演が組まれていたが、健康上の理由により教授が欠席され、その代わりにベックの P. Grammont 師の“Saint Anselme, Le Moine”が代読された。発表は、テーマ別に2,3名ずつ組まれた Short Presentations の間に Major Addresses が2つずつ入り、持ち時間は major papers 1時間弱、short papers 約30分間で、質疑応答の時間は充分あり、時間切れになりがちであった前回の経験が生かされていた。Short Communications のテーマは、A. 聖アンセルムスと聖アウグスティヌス (1. 神の存在に対するそれぞれの証明, 2. 真理と悪の問題, 3. 自由意志の問題, 4. 聖アンセルムスと聖アウグスティヌスにおける聖書の使用), B. 聖アンセルムスにおける修道院霊性 (1. 修道院の精神と伝統), C. 聖アンセルムスと教会—国家の関係 (1. 司教職と教会—国家の関係), D. 後代の哲学、神学に明白なアンセルムスのテーマ, E. 聖アンセルムスの源泉並びに著作の研究、に分類され、A—1, 3, 4 と E は更に2グループに分かれた。筆者の発表は、悪の捉え方をめぐりアンセルムスとアウグスティヌスを比較考察したもので、A—2に属した。Major papers は、上記 P. Grammont 師のもののほか、以下の11である。S. W. Laycock, “The Phenomenologist’s Anselm”. W. Fröhlich, “Saint Anselm *Weltbild* as Conveyed in His Letters”. R. Campbell, “Freedom as Keeping the Truth: The Anselmian Tradition”. E. A. Synan, “Truth: Augustine and Anselm”. D. P. Henry, “Anselm and the Linguistic Disciplines”. (但し、本人欠席) J. Vuillemin, “Les preuves cartésiennes et la preuve du *Proslogion*”. S. N. Vaughn, “Monastic Sources of St. Anselm’s Political Beliefs: St. Augustine, St. Benedict and St. Gregory

the Great". H. Kohlenberger, "Die Theologie des Klosterwesens des Heiligen Anselmus". K. Kienzler, "Zur philosophisch-theologischen Denkform von Augustinus zu Anselm von Canterbury". A. Schurr, "*Relevanz und Dimension eines erkenntnistheoretischen Philosophierens. Die Artikulation christlichen Glaubens im Gegenüber zur Position des Nicht-Glaubens bei Augustinus und Anselm*". V. J. Bourke, "A Millennium of Christian Platonism: Augustine, Anselm, Ficino". パーク教授の講演は、PMR Conference の基調講演を兼ねた。

発表申込者は当初 44 名であったが、アメリカ、カナダ以外からの大会参加者は、最終的には、ドイツ 4、フランス 3、オーストリア、アイルランド各 2、イギリス、オランダ、スイス、アルゼンチン、オーストラリア、日本各 1、そして発表予定者 2 名のいたイタリアからの参加者は 0 であった。そのため、原稿を提出するのみで発表者欠席のケースが多く（会期一ヶ月前までに提出された原稿は、コピー・整本して登録の際に手渡された）、討論のない原稿にどのような意義があるのか、という不満を訴える方もおられた。因みに、PMR 学会では、学会時に実際に読まれた原稿のみが出版印刷の選考対象となる旨、プログラムに明記されていた。

3 日目午前にはフィラデルフィア見学があり、5 日目夜には V. J. パーク教授の講演の後、アンセルムス学会、PMR 学会合同のレセプションが、また、最終日夜には両学会合同の閉会パーティーが催された。4 日目午前にはフィラデルフィア大司教 J. Krol 枢機卿が来学、アンセルムス学会を代表して、international secretary を務めるコーレンベルガー氏が挨拶を述べた。更に、The Augustinian Historical Institute は、会期中の連日午後、見学可能であるように手配されていた。

昼・夕食を共にしての一週間は、終始家庭的な暖かい雰囲気にも包まれた。加えて、スケジュールが臨機応変であったため参会者同士で当該会場を探しまわったり、フットボールの試合により駐車場が溢れる恐れがあるため早目に来学して駐車するよう事務局から呼びかけがなされたり、といかにもアメリカでの学会らしい出来事もあった。数々の偶然が重なり、V. J. パーク教授に筆者の発表の司会をしていただいたことも、忘れ得ぬ思い出の一つである。

今回の成果は、著者により実際に発表された原稿のうち major papers 全てと選考に通った short papers が単行本として、また、事務局に提出されたが著者欠席のため発

表されずに討論を経なかった short papers のうち選考に通ったものが *Anselm Studies*, vol.2 に収録され、いずれも 1986 年度内に出版されることになっている。次回のアンセルムス学会は、1990年7月または9月に予定されており、開催候補地として、アウグスブルク、ウィーン、フィレンツェ、ローマの4都市が挙げられた。